

禪・仏教研究の方法論について

——『禪研究所紀要』第五十号記念特輯刊行に寄せて——

禪研究所所長 岡 島 秀 隆

はじめに

近年学際的研究が増加の一途を辿っていると聞く。この記念号を刊行するにあたり、われわれ研究者がどのような方法論に基づいて研究を進めているのか、殊に本学の研究者がどのような研究領域を取り扱い、どのような研究方法を用いているのかを自己確認するとともに、他の研究者がどのような研究をしているのかを認識しておくことも今後の個々の研究を進める上で必要があるのではないかと考える。ここでは具体的な事例紹介も行いながら、禪・仏教の研究の多様性と研究方法の特性について考えてみる。

禪・仏教研究の方法論について（岡島）

また、現代の情報科学技術の発展はめざましい。学問研究がある意味で情報の収集と解析という作業に大いに関わっているかぎり、今後の研究は情報科学技術に左右される面を持つている。そうした点にも留意して以降の考察を進めることにする。

一 研究領域に関する伝統的分類

曹洞宗門では、伝統的に「宗乗」と「余乗」の語が用いられてきた。『禪学大辞典』（大修館書店、一九七八年刊）などには、以下のような記載が見られる。

(1) 宗は宗家・本家の意。乗は運載。衆生を運載して佛

地に至らしめる意。小乗大乘に対して達磨門下の宗旨・禪の極致をいう。

- (2) 後世、各宗が分立するに及んで、各宗自らの宗義・宗旨・宗学を宗乘と称し、他宗の宗義を余乗と称する。（用例）宗乘眼 宗乘に対する見識。宗旨眼・宗乘の力のこと）

* (2)に関連して、他宗の宗義研究という明確な規定ではなく、宗教教義の研究を離れて、異なる問題意識や異なる方法論で禪宗の研究に関わる場合も含めて、禪の宗乘以外を大雑把に余乗と称するような漠然たる使用例もあると思われる。

第一の宗乘に関する説明は実に明快であるとともに、仏教の中における「禪宗」の立場を宣揚しようという意図が感じられる。第二の説明では宗乘の語の概念規定が拡散一般化している。両者に優劣があるわけではないが、現在の理解は一般化された第二の理解が広く受け入れられているように思うが、このことは一方で宗乘の語とその対極を示す余乗の語の概念規定を曖昧なものにしているのは確かである。ただ、余乗の語の与える印象がどこか二義的な研究領域を表現する感のある点は否定できない。各宗派がそれ

ぞれの宗旨の優越性を主張することは当然とも考えられるが、各々の宗派において余乗に組み入れられる研究が軽視されるとすれば、学問的価値の平等性を思うとき、いささか前時代的で、差別的な意識を感じずにはいられない。

二 岸本英夫の宗教研究の四分野

宗教研究の分類について、『宗教学』（大明堂、一九六一年刊）に記された内容を概説すると、岸本氏はまず主観的研究と客観的研究に二分する。その概念は以下のようになる。

- (1) 主観的立場としての神学的研究と宗教哲学的研究
・ 神学的立場は、「信仰の立場からの研究である。特定の宗教によって、与えられている大前提を、無条件に受け入れる。考え方の根拠をつねに、その出発点である大前提に求める」のである。

・ 宗教哲学的研究は、「その幅が広い。ここでは、人間の理性を抛りどころとする宗教の研究といつてよいであろう。自分の理性が納得しない限り、神学に対しても、批判を与えることを辞さない。しかし、その研究

の目的とするところは、宗教の本質を明らかにし、自分にとつてあるべき宗教を究めようとすることにあ
る。その意味で、これも、「主観的立場を離れない」の
である。

(2) 客観的立場としての宗教史的研究と宗教学的的研究

この分野は科学的研究と言われることもある。歴史的研究と体系的的研究が挙げられる。近年両者の差は非常に小さくなってきた。前者が過去の事象を研究し、後者は現在の事象を研究するというような区別は意味を持たなくなつてきている。研究対象は両者ほとんど共通である。ただ、次のような相違はある。

- ・ 宗教史的研究は、「それを、一回起的 (einmalig) な特定の宗教事象として、個別記述的 (ideographic) な「取り扱う」のである。

- ・ 宗教学的的研究は、「それを、類型的な現象の一つの現れとみて、法則定立的 (nomothetic) に扱う」のである。

*しかし、「宗教学」という言葉の概念には「ゆらぎ」があり、その概念が最も広く考えられる場合はこの四分野の全てを包

禅・仏教研究の方法論について (岡島)

含するし、最も狭い意味では、最後の「宗教学的的研究」の分野のみを指す。

三 研究分野の具体的事例

それでは、現在本学において禅研究所の研究活動に参加している研究者はどのような研究分野を専門としているのだろうか。以下の事例は、研究者から受けた報告に基づいている。

事例 1

インドを中心に、南アジアに展開した大乘仏教思想を主に研究している。近年は、大乘仏教思想のなかでも、認識論や論理学を盛んに論じた「仏教論理学派」と呼ばれる一群の思想家の資料の解明に取り組んでいる。この伝統は、東アジアでは「因明学」と呼ばれるが、同派の思想家は、他学派と盛んに議論を交わしつつ、緻密な論証を用いて哲學的諸問題に取り組んだことが知られ、その思索は、論理と宗教の緊張関係など、私達が現代の問題を考える際の手掛かりを与えてくれることが少なくない。

インド仏教研究の難しさは、仏教の伝統が、その発祥の地において既に途絶えていることにある。そのため、大乘仏教の思想研究においては、仏教国であるネパールやインド各地の古文書館などに僅かに残された文献資料を参照するだけでなく、チベット語や中国語（漢文）に翻訳された文献を併せて考察することが必須となる。

これまで、インドの古文書館やジャイナ教僧院に付設された書庫などを調査し、主にサンスクリット語で書かれた仏教写本の蒐集に努めてきた。並行して、オーストリア科学アカデミー（Austrian Academy of Sciences）と中国蔵学研究センター（China Tibetology Research Center）の間で二〇〇四年より開始された国際プロジェクトに参加し、その枠内で初めて利用可能となったチベット自治区の仏教僧院に由来する写本（貝葉写本）の研究を継続している。さまざまな経緯を経て現代に伝わった資料を手掛かりに、アジア各地に影響を与えた仏教思想の本来の姿を考察することが、インド仏教研究の醍醐味と言える。

（文・石田尚敬）

事例 2

いわゆる「禪」に関する研究において、その対象は菩提達磨を祖とする「禪宗」であることが多い。しかしながら、仏教史上、「禪」を標榜するのは何も「禪宗」だけではない。中国各地で「禪観」を修習した者も同じく「禪」を掲げ、周囲からは「禪師」と称される場合もあった。筆者が研究対象とするのは、こうした実践としての「禪観」、及びこれを修習する者の思想である。

具体的人物として第一に挙げられるのが、智顛（五三八一—五九七）である。「震旦の小釈迦」とも称される智顛は、中国のみならず、日本を始めとする東アジアの仏教全体に多大なる影響を与えた人物である。智顛の実践・思想が晩年における「止観」の大成によって確立されることはひろく知られるが、その基礎となるのはインド以来の各種「禪観」の体系化を試みた前期時代の著作である。したがって、智顛による「止観」の大成を見る場合、「禪観」という視点からの考究が不可欠である。

特に、智顛の著作の中でも最初期に講説された『釈禪波羅蜜次第法門』には、智顛の「禪観」に対する基本的理解

が示されている。そのため、同書を中心にその他の講説を見ることにより、智顛の実践・思想における「禅観」としての特徴を明確にすることができる。

智顛が如何に「禅観」を受容したか考究することは「止観」大成の淵源を探ることであるとともに、仏教史における智顛の位置付けを考える手掛かりともなる。延いては、インドに連なる東アジア仏教の実践・思想を「禅観」というキーワードによって体系化することに資するものとなる。

(文・大松久規)

事例3

研究テーマは『洞谷記』の成立史、および瑩山禅師伝の変遷の研究である。

『洞谷記』は、瑩山禅師が洞谷山永光寺(石川県羽咋市)開創前後から最晩年に至る日記を中心とする史料で、現在のところ二系統五本の写本の存在が知られている。それら各写本がどのような過程を経て作成されたのか、写本間の関連性を中心に、瑩山禅師の遺跡寺院などに遺される『洞谷記』の文章を引用したと思われる文献も照らし合わせる。

禅・仏教研究の方法論について(岡島)

せ、その解明を試みるとともに『洞谷記』の原形を探究している。

また、『洞谷記』は、瑩山禅師の行状を伝える最古かつ最も基礎となる文献であり、それを中心に瑩山の実像の解明、および瑩山禅師像形成の過程を、『洞谷記』および江戸期までに成立した各伝を系統分けし、内容や文面の比較をすることを交えて、明らかにしようとしている。

いずれにおいても、原本となる写本等をできるだけ用いて、活字化されたテキストの誤りを正し、より正確に資料を用いることを心掛けている。

(文・河合泰弘)

事例4

仏教の特定の宗派における宗旨・教義・実践の研究は、その時々で支配的なドグマの影響を受けやすいものである。また、教義にしても実践にしても、十分な検討を経ないままに、開祖以来の伝統などと読み替えられることもある。しかし、開祖自身が組み立てた思想も、現状のドグマも、歴史的な経緯を経て成立しているものであり、思想的な方法を用いた研究は必須といえよう。

つまり、特定の教団におけるドグマを離れ、宗旨・教義・実践が歴史的経緯をもって成立したことを明らかにし、より自由な立場での研究を進めることで、各時代での状況を深く理解することが可能になる。

そのため、より広く理解するために、新資料の発掘・発見はもちろんのこと、従来既知とされる資料についても、価値判断を新規に行う必要がある。その場合には、成立当時の影響の有無を基本とした価値付けを行いつつ、その後の影響を厳密に判断する必要があると言えよう。また、その影響や価値が、当時の社会情勢や教団の状況とどのように関連し、また、作者自身の置かれた様子を史伝などの分析を通して、より正確に理解する必要がある。

例えば、近世の初期から中期にかけての曹洞宗内における戒思想の展開を検討することで、当時の僧侶による戒思想の学びや、教化意識などを探る場合、従来は「禪戒」というキーワードを中心に、「禪戒一如」などの用語が前面に出る形での宗旨・教義の形成が見られたが、「禪戒」という用語自体、曹洞宗の両祖である永平道元・瑩山紹瑾は用いた形跡がない。つまり、後代に作られた概念であり、

その成立や展開を批判的に考察し、場合によっては解体的検討も必要であると思慮するものである。（文・菅原研州）

事例5

日本曹洞宗の瑩山紹瑾（一二六四～一三二五、道元から四代目の弟子）に関する領域を研究課題として取り組んでいる。特に、近年は鶴見大学仏教文化研究所と共同して『伝光録』（瑩山の講義録）に関する写本の調査・撮影を中心にを行っている。『伝光録』は瑩山の思想を知るうえで、きわめて重要な資料であるが、『伝光録』の本文研究は蓄積が乏しく、もつとも古形を保持した本文系統や写本間の相互関係が明らかにされたとは言い難い状況を呈している。こうした現況をうけ、写本への文献学的アプローチを行っている。かかる作業を経ることで、『伝光録』研究において依拠すべき本文が明らかとなれば、それは研究情報基盤の整備へと直結するものである。現在行っている『伝光録』への文献学的研究は、瑩山の思想研究を推進するための基礎的研究に位置づけられるであろう。

また、調査を通して蓄積された写本のテキストデータを

利用し、オンライン上において諸写本の本文を対照できるテキストデータベースの公開や、瑩山に関連する資料のデジタル・アーカイブ化なども企図している。

(文・横山龍顯)

事例内容を整理してみると、以下のようになる。

- (1) 各研究者の研究対象とする地域は日本国内が多い。だが、インド・中国など海外を対象とするものもある。
- (2) 各研究者の使用言語は日本語だが、欧米語を使用する者もある。また、研究の性質上、日本・中国・インドの古語を取り扱う場合は多い。
- (3) 各研究者の研究分野は、広義には思想研究・思想史研究だが、日本仏教研究・中国仏教研究・インド仏教研究が主な領域である。特に禅宗史研究、曹洞宗学の研究は伝統的に強く意識されている。
- (4) 研究対象とする時代区分は、古代・中世・近世・近代・現代と網羅的である。
- (5) 文献学上のテキストクリティックなどに現代情報科学の手法を導入しようとする場合もある。今後この傾

禅・仏教研究の方法論について(岡島)

向は進行すると思われる。

四 現代論理学における探究方法

次に、研究方法について考察を進める。ここでは、ヘンリー・パースの論文集の中から「現代論理学の課題」(『世界の名著48 パース ジェイムズ デューイ』中央公論社、一九六八年刊)第一章「探究の方法」を手がかりに考えてみる。

ヘンリー・パースは、疑念と信念形成のプロセスについて分析して「疑いをいだいているときには問いを發し、信じているときには判断をくだす」という。また、「信じているという感じは、ある習慣がわたしたちの性質のうちに確立されていることの証拠であり、そうした習慣はわたしたちの行動を決定する」とまでいう。この疑念と信念の関係、むしろ疑念から信念へのプロセスは理性の自然な成り行きであって、そこに「探究」と呼ばれる状態が生じるのである。「疑念が刺激となって、信念に到達しようとする努力が生ずる。この努力を、必ずしもぴったりにした名称ではないが、「探究」と名づけよう」とも述べている。そし

て、我々は強固な信念、それが真であろうと偽であろうと「真である」と考える信念をもとめる」というのである。そうした洞察の後に、探究方法の四類型をあげて、それぞれを次のように説明している。

〈固執の方法…特徴 自己中心性〉

第一に「固執の方法」が挙げられる。その特徴は「自己中心性」にあり、信念決定の基準は「自己の願望にかなう」ことである。この方法は日常的に我々がよく行う方法である。自分の信じる信念は正しく揺るぎないものであり、その信念と対立するような考えは無視したり排除したりするという行為を我々は無意識に実行している。パースはこの方法の説明の中で印象的な例を示している。「駝鳥は危険がせまったとき頭を砂に埋めるが、それはもつともうまいやり方だといってよからう。駝鳥は危険をかくしておいて、静かに、もう危険はない、という」これが信念を揺るぎなく保持し、精神に平安をもたらす方法だということである。しかし、「もし（ダチョウが）本当に危険がないと感じているのなら、なぜ頭をあげて見ないのか」と言葉が続けられている。こうした状態を継続することは難し

い。人間には社会的衝動があり、他者が自分とは異なる考えや信念を所持している場合があることを認めないわけには行かないからである。固執の方法によって作られた信念はこうして揺らぐことになるのである。そこで次に求められるのは「個人の心のなかだけで信念をつくるのではなく、社会の場で信念をつくりあげる」方法である。

〈権威の方法…特徴 集団中心性〉

そこで現れるのが第二の「権威の方法」である。個人の信念が揺らぐとき、さらに強力な国家の意志が形成され働くように仕向けられることがある。そのためには特定の機関が必要とされ、それは「国家意志の実現のために、国民の面前で正しい公認のイデオロギーを守り、それをたえずくりかえして説き、それを青年に教えこまねばならない」。また、そうした機関はその目的のためには必要な暴力や拘束力などの強硬手段を実施できる権力を与えられることがある。そして、それらの機関・組織が絶大な効果を発揮したケースは過去の歴史によって証明されていると言われる。パースは、この方法は「古来、正しい神学的ないし政治的な教義を支持し、その普遍性と正統性を維持するため

の主要な方法の一つとされてきた」と述べている。しかし、これらの方法は国家や政治の場面でのみ用いられてきたわけではなく、「僧職の存在するところ、したがって宗教の存在するところでは、この方法が何らかの形で用いられてきた」のであり、貴族政治やギルド（特権的職業集団）など組織化されたメンバーの利害が存するところには、この方法の痕跡が認められるという。過去の歴史を振り返ってみると、人間集団にとってこの方法によって形成された組織的信念体系ほど優秀な功績をもたらしたものはないともいわれる。だが、パースは「あらゆる問題について意見を統制する役割を果たすことができるような機関は存在しない」と指摘する。人間の社会集団において「権威の方法」が効果を発揮できる範囲は重要な問題のみに限定され、他は自然の成り行きに委ねられるほかはないのである。確かに、この方法の不完全さは人々が互いに意見を交

流して新たな意見を導き出すような文化状態がなければ露呈しない。しかし、社会には体制に迎合しない型破りな人物が現れるものである。そして、こうした人物は、他の時代や地域の異質な信念や風習を知っており、「権威の方

禅・仏教研究の方法論について（岡島）

法」のよりどころとする社会的感情よりも、さらに広い社会的視野の持ち主である。そうした人々が公平な目を用いるときに、この方法の弱点が露呈するのであり、それはこの方法によって形作られた社会的信念に疑念を生じさせるのである。ここで「固執の方法」「権威の方法」に代わる信念確定方法が求められることになる。

〈先天的方法…特徴 思弁的普遍性〉

パースによれば、この新たな方法は「信じようとする衝動を生み出すばかりでなく、いかなる主義主張が信じるに値するかを決定する方法である」とされ、しかもそれは、「わたしたちのもって生まれた好みをなんの束縛もなくおもむくがままに放任し、その好みの影響のもとに、人びとがたがいに話し合ったり、さまざまな視点からものごとを考察したりしながら、各人の信念を自然の道にさからわずに徐々に発展させるように仕向ける」ものであり、これは芸術という概念の成熟に寄与した方法と類似していると言われる。

それでは個々人の信念を自然の道に逆らわない形で発展させ形成する方法とは、どのような根拠に基づくのだろう

か。「固執の方法」は自己中心的で個人の嗜好に左右されていた。「権威の方法」は集团的信念を個々人に与えたが、そこには強制と思ひ込みが支配力を持っていた。パスによれば、次に見る「先天的方法」の完全な実例は、形而上学の歴史に顕著に見出され、その体系（特定の形而上学）は一般に観察される事実には立脚していないという。しかし、体系の基礎をなす命題が「理性にかなう」ことが重要な基準であるとされる。パスは「理性にかなう」というのはピツタリした表現だ。それは経験と一致することを意味せず、信じた気持ちになることを意味する」という。そして、これらの方法は多くの哲学者たちが実行してきた方法だが、そうして導き出された個々の信念体系（形而上学、哲学）は、議論の中に投げ込まれることで、いわば洗練され進化して一層普遍的な性質を持った見解へと進むのが自然の成り行きだが、そこには未だ「好み」が存在するとされ、この方法は前の二方法よりはるかに知的であるが、「学問的研究というものを好み（趣味）の発展に似たものと見る」という欠陥があると述べている。この方法によって導き出された結果は好みに左右されるので、本

質的に「権威の方法」と同類であり、最終的意見の一致には到らないというのである。

（科学の方法…特徴 経験的普遍性）

そこで、問題解決のために新たな方法が検討されるのだが、パスによれば「その方法は、信念を、人間的なものによってではなく、人間の外の永遠なもの、つまり人間の思考によって左右されないものによって決定するものであらねばならない」という。そして、その「外的な永遠なもの」とは、「すべての人に作用を及ぼすものでなければならぬ」のであり、さらに、この新方法においては「すべての人の究極の結論が同じものにならなければならない」とされ、これこそ第四の「科学の方法」と呼ばれるものにも他ならないのである。この方法を説明するにあたって、新しく導入された概念がある。それは「實在」という概念である。ここにいう實在とは、我々の感覚器官に作用を及ぼす何物かであり、それ（實在）と我々の関係に依じてその現れ方は異なるが、その事物の本体は誰にも推論できるとされる。また、「ある實在物がある」という仮説が、この探究方法の支え（前提）である限り、實在物はその方法の

適用外にあるとされる。この实在物を信念確定の根拠とするからには、すべての人はそれを疑いえないのであって、従つてこの方法が普遍的信念を算出するのに最も適しているように見えるのである。

この四つの方法の比較において注目されるのは、先天的方法と科学的方法の接点についての指摘である。この接点に位置する事例としてヘーゲルの思索に留意しつつ、パスは「科学的方法によつて疑いの余地がないとされるものは、ほどなく形而上学者の立場からする先天的論証を受け入れるということをだれも疑うまい」と述べている。

こうした言述を見ると科学的方法によつて導き出された信念も絶対というわけではない。科学的方法の場合、それ自体が事実と推論に基づく論証そのもので、それによつて導出された結論は最も信用に値すると考えられるが、これまで導き出されてきた科学的真理・法則なるものも、新たな科学的発見によつて否定され書き換えられる。そうした事例を我々は実際に知つている。科学的方法によつて導出されたものは、あくまで仮説であつて普遍絶対の真理ではないともいえるのである。

禅・仏教研究の方法論について（岡島）

また、科学的方法以外の三つの信念確定方法にも長所はあるという。先天的方法は、冷酷な事実がさらに妥当な理性判断を見出すまでは気持ちの良い結論を示す点で抜きん出ているという。さらに、権威の方法は集団を支配するが、反面でその集団に安全と平和をもたらす。だが、そういう社会の中で異端視される思想に魅力を感じてしまった場合には、その人は後ろめたさや自己嫌悪に苦しめられる。固執の方法には単純さと単刀直入さがあり、最も強力である。この方法に従う者は、思慮に欠ける面があつたとしても決断力に優れているという。

このようなパスの論考を起点として、今日の学問的研究方法について、問題点を洗い出してみよう。

(1) 学問的研究方法という場合、それは科学的方法以外にはなく、その他の方法は個人の嗜好や政治的形態など日常生活に関わるものであると考えることは適切ではない。

(2) 科学的方法が事実ないしは現象に基づくとしても、その事実に関する認識が新たな検証方法・検証技術の進歩によつて変容することがある。

(3) 人文・社会系の研究方法において純粹に科学的方法を採用するとは具体的にどのような事態を指すのかが不明瞭である。

(4) 人文・社会系の研究方法における科学的方法が、単に実証的方法として理解されるのであれば、基礎資料の信憑性を確定するための技術（考古学における炭素年代測定など）を用いることは、その研究に寄与するが、基礎資料をどのように取り扱うかは研究者の意思に委ねられている。

(5) パースの四つの探究方法は、疑念と信念の相互関係を通して最後の揺るぎない信念確定の手段として科学的方法に軍配を上げる。このことは、研究の客観性をどう担保するかという問題に深く関連している。しかし、どの方法においても信念の確定は可能なものではないか。学問的領域における研究方法に限定したとしても、客観性を担保できない探究方法はなぜ承認されないのであるか。主観的思想や主張が社会的に大きな影響をもたらす事例もある。むしろ、方法論に優劣をつけたら、善悪を判ずる態度の方が自由な研究活動や創造的

研究を損なうのではないか。

五 慣習的学問研究と批判的学問研究

かつて「現象学」は学問の対象自体、殊更科学の対象自体について問い返した。こうした領域で我々が対象とみなすものは、真に対象と言いうるのか、我々が科学の領域で対象とするものは「現象」と言い換えられるが、その現象とは何かを問い直したのである。カントは人間の五感に受け取られ、その認識に再構成されたものは、「物自体」ではないと考えた。フッサールも「事象そのもの」は我々の主観的判断のすべてを一時的に中止しなければ肉薄することはできないと指摘したのではなかったか。こうした対象の信憑性そのものへ向けられた疑問は、ある意味で学問研究の停滞を招くのではないかと考えられるが、これは学問的原点回帰とも言える。それではなぜこうした原点回帰が求められるのか。それは我々人間理性に「疑う」という本性が内在しているからかもしれない。ただ、デカルトのコギトは、疑い、欲し、感じる精神の意味であろう。さらに、この原点回帰は我々の精神・自己意識がさまざまな

思い込みや偏見といった後天的な知識概念を身につけてしまいう性向があることにも関連している。そして、そういう後天的なものをできる限り取り除いて（色眼鏡を外して裸眼で）対象を見直すことが期待されるのである。

研究対象に関するこのような反省と見直しの必要性が求められたとしても、具体的な実現が限りなく困難だとすれば、せめて、現在の自分の見地を、批判的に取り扱う姿勢をとるという選択は可能であろう。

学問研究には慣習的学問研究と批判的学問研究の二様があるという指摘がある [Daniel Patte, *Discipleship According to the Sermon on the Mount*. (Valley Forge, PA: Trinity Press, 1996) における “Traditional Scholarly Interpretations” と “Exemplary Critical Interpretations” という分類を、荒井ポローラが “Customary Scholarly Interpretations” と “Exemplary Critical Interpretations” と言い換えた表現で、『禅研究所紀要』第二十八号に掲載された荒井の英語論文中に見られる。それを筆者が翻訳したのも]。個々の人間は各々の言語・文化・教育などの環境および各自の諸経験によって、異なる価値・認識・判断を獲

得する。それらの個々人が学問研究に携わる場合、学問の客観性を確保することがいかに困難であるかは想像にかたくない。我々が学問に携わるとき、当初から我々は主観的であり、関与者なのである。それゆえ慣習的学問の視点に立つこと、そして、その伝統的方法を採用することは、この学問的客観性を確保する手段として有効に見える。慣習的学問研究とは、先に述べたパースの分類によれば、権威の方法ないし先天的方法に関連している。

一方、批判的学問研究は、慣習的学問研究に対置されるが、それは人間の個別性をむしろ意識して、自覚的意図的に自己の立脚点を明確にすることから始まるものである。そうすることで研究者のキャリアの多様さに応じて研究方法も多様となり、研究領域も拡充される可能性がある。

六 現行の学問分類

今日の学問研究の分野は多義にわたる。今後ますます分野を横断する形の学際的研究も増加すると思われる。自然科学・社会科学・人文科学などの各分野の中に下位分野があり、その中に個別の専門分野が存する。また、個々の専

門分野にしても、それを厳密に単一分野に分類することは困難な場合が増えてきている。

例えば、宗教学は人文科学に属すると考えられることが多いが、先の岸本博士の分類のように、その概念を狭義に捉える場合と広義に捉える場合があるし、広義に捉えた場合に内包される四分野を考えても、宗教史学は歴史学の一部と考えることが妥当とも言えるし、宗教哲学は哲学に包摂されることもある。さらに、宗教を心理学の方面から研究する宗教心理学は心理学に属するとも考えられ、社会学・地理学・人類学の研究法や概念を用いて研究する場合は宗教社会学・宗教地理学・宗教人類学という名称を冠することになる。こうなると、広義の宗教学は他の分野と包摂関係にあるとも言える。しかもこのような包摂関係は上位分類の人文科学の領域を超えて、社会科学などの他の領域との間でも成立しうる。こうした状況を考慮すると、個々の研究者の研究内容を単純な研究分野に振り分けることは困難であり、むしろ意味のない行為とさえ考えられる。

七 科学の進歩と新たな研究法

ある技術が開発されると、そこから新たな可能性が生まれる。現代の技術開発は、はじめに目的ありきで、そこから開発が始まるというばかりではないのである。最近のドローン技術の進歩は社会の多方面に影響を与えている。オリンピックの開会式イベントに使用されて注目を浴びているが、単なる玩具の域を超えて軍事利用も含んだ多様な分野で情報収集技術や物資の運搬技術としての活用が進行している。そして、この技術を利用した人間の移動交通手段まで現実のものとなりつつある。また、現代においては地図作成の精度の増進はもとより、作成された地図の更新速度も著しく加速されているが、ドローン技術はそうした分野にも貢献しているのかもしれない。学問研究においても、この技術を活用することで地理学・地形学・地質学・考古学などの分野に新たな発見や修正が加えられていると聞く。

情報科学分野の進歩も社会に多大な影響を与えている。外国語の翻訳技術は格段の進歩を見せ、現在も技術開発に

鎬が削られている。社会がグローバル化する中でコミュニケーションの必要性は喫緊の要請だが、「言葉の壁」という表現が遠い過去のものと考えられる時代が間近に迫っている。こうした言葉の問題は音声言語と文字言語の両面で展開しているが、一般人がストレスを感じずに異言語を使用する人たちと日常会話が可能となったり、さらに複雑な思索を共有したりするには少し時間がかかるであろう。しかし、それらの技術開発はすでに多方面で開始されている。さまざまな学問研究に関わる基礎テキストや辞典類のデジタル化と公開は、著作権をはじめとする知的財産権の問題などを抱えながら、確実に増進されている。京都仏教各宗学校連合会編『新編 大蔵経―成立と変遷―』（法蔵館）には第四章「日本近代の大蔵経出版」の三節に「データベース」の項目が設けられている。ここでは「これまで出版された大蔵経のみならず、蔵外仏典や古写本のデータベース化も進み、古写本および仏画をデジタル画像として保存し公開する動きも盛んに行われている。デジタルデータがインターネット上にのぼることで、普及と恒久化のみならず、コンピュータとネット環境さえあれ

ば、いつでも容易に閲覧が可能となり、携帯や複写も便利になった。なかには検索不可のものや、特定のグループに属するのみがテキストにアクセスできるものもあるが、検索が可能なテキストデータの存在によって、用語の検索がきわめて短時間で行えるばかりでなく、異なる文献間の比較も容易となり、文献研究を格段に発展させた。：中略：仏典の電子化は世界的な動きとなり、一九九〇年代以降続々と公開されている。テキストデータベースの作成に当たっては当初、異体字や字体コードの問題などいくつかの大きな問題があったが、現在ではその多くはクリアされている」と指摘されている。漢文大蔵経では「大正新脩大蔵経テキストデータベース (SAT)」や台湾の中華電子佛典協會 (CBETA) の成果が知られているが、両者は相互の協力関係を結んでいる。また、SATは『電子仏教辞典』の見出し検索とリンクしているし、INBUDSなどの論文データベースともリンクしている。さらに、BDK (仏教伝道協会) の英訳大蔵経との文章単位での照合も可能になっている。さらに、デジタル画像の相互運用のための国際規格 (IIIF-BS) への対応が行われ、「京都大学貴重資料

デジタルアーカイブ」とのインテークタイプリンクも実現している。こうした基本テキストのデジタル化が研究活動にもたらず利便性のメリットは計り知れない。将来、これに加えてAI自動翻訳技術の進化などが進めば、研究スピードの加速化だけでなく、研究の質的变化が生じるかもしれない。また研究のグローバル化とプロジェクト化が進むことは明確であろう。

テキストの画像デジタル化は今後の学術研究に大きく寄与するものである。しかし、それ以上に注目される技術がある。それは先に挙げた翻訳技術である。「Google翻訳」などネット上に見られる翻訳ソフトの現状は決して満足できるものではないが、確実な進化を見せており今後に期待したい。ここではもう一つ例を挙げることにする。日本語「くずし字」検索における読み取り技術は新たな局面を迎えている。手書き文字を読み取り活字化する「OCR技術」は、以前から存在しており、市販ソフトもバージョンアップを重ねているが、音声の読み取り技術ほどに進化のスピードは加速していないように思われる。文字言語には多様な側面がある。日本語においても漢字・ひらがな・カ

タカナ・英字などが混在して複雑な構成になる。こうした複雑さが要因の一つなのかもしれない。そうした状況下で、日本語「くずし字」OCR機能の開発を進める「人文学オープンデータ共同利用センター（Center for Open Data in the Humanities / CODH）」の活動が知られている。本センターのホームページには、その目的について「情報学・統計学の最新技術を用いて人文学資料（史料）を分析する「データ駆動型人文学」や、人文学研究成果に基づき構築したデータセットを超学際的に活用する「人文学ビッグデータ」など、オープンサイエンス時代の新しい人文学研究を展開します」と述べられている。このセンターの活動には日本古典籍のデジタルデータセットの作成公開があるが、収集された典籍資料に含まれる「くずし字」データセットの作成と検索機能の開発も行われている。二〇二一年八月三十日には、これに関連してAIくずし字認識無料アプリ「みを（miwo）」のAndroid版とiOS版が正式公開されている。その精度は不十分だが今後の改良が待たれる。開発にあたって興味深い点の一つは、その開発者である。開発者はタイ国出身のカラーヌワット・タ

リンである。専門分野は『源氏物語』古註釈の研究だが、日本文学における機械学習、特にディープラーニングによる「くずし字認識」の研究も行っているという。現在、古典籍をすらすら読める研究者は少ない。一般の人々には尚更困難である。そうした状況を変える手段として注目されるのが、上述のようなデータサイエンスの進歩である。しかもそれが日本語を母語としない研究者によって進められている事実には大きな意味がある。今日の学問研究は、社会のグローバル化とボーダレス化の進展と学際的研究の増大に伴って、必然的に個人研究から集団チームによる共同研究へと重心が移行している。これまで日本の古典文学研究など人文学の分野も、日本語を母語とする研究者の聖域とはならない。くずし字認識技術など情報科学技術の開発は、今後さらにこうした状況を加速化すると考えられる。こうした状況は、情報倫理の問題など新たな課題も生み出すであろうが、研究の効率化とスピードアップや独自の研究の可能性など多くの利点も考えられる。これからの研究環境にもたらされるこうした変化を、私たちはいち早く想定し受容しなければならぬ。

禅・仏教研究の方法論について（岡島）

八 学問研究の将来

研究方法の一貫性はその研究の質の担保と評価の大きな条件ではなかったか。しかし検索技術の長足の進歩はそれを崩す可能性がある。ある意味でそれは研究の進展に役立つ。それは第一に研究速度を加速する可能性がある。また、技術は研究経費の削減に大いに貢献するかもしれない。しかし、その前提は研究者がそうした技術の導入に対応できるかである。その場合、研究における分業化、共同研究の必要性はますます増加するよう思われる。

それぞれの研究分野におけるグローバル化が進行するにつれて、海外研究者とのコミュニケーションが進むことになれば、そこからは多様な可能性が生まれる。確かに、個々の語学力格差は直近の問題となるであろうが、これも翻訳技術の昨今の進歩スピードを考慮すると、解消の方向に確実に向かっている。研究者相互の対話における微妙なニュアンスの違いをどのようにカバーし乗り越えるかといった課題が想定されるが、昨今のAIの情報処理能力の進化は、それらの問題を解決してくれる可能性が高い。そ

れでは研究のグローバル化の進展はどのようなメリットをもたらすのか。それは先ず新しい研究視座を創出するかもしれない。異なる環境に育ち、異なる価値観を持つ研究者が研究に参加することは、研究に新鮮なアイデアを与えると考えられる。共同研究に不可欠の相互理解とコミュニケーションに必要な道具は整備されつつある。

先述した研究活動事例においては、すべての研究者が研究手段として文献学を基礎に置いている。このことは人文系学問全般に見られる傾向といえよう。しかし他方で、研究資料の取り扱い方法などはそれぞれの研究者の判断に委ねられているのが現状なのかもしれない。これらの研究方法についての自覚と自主的表明は今後その重要性を増すこととなる。なぜならば、多様性を特徴としている現代社会において、自己の見地・立脚点、方法論を明確にすることは自己のアイデンティティを確保するために必要な不可欠の条件だからである。また、このことは学問研究において研究の独創性を示すためにも重要である。さらに、学際的研究や共同研究が増加するとなれば、それぞれの研究者が研究方法について相互理解を深めておかなければなら

い。加えて、学問研究者の倫理的姿勢が問われる機会が増える現況で、個々の研究の倫理的妥当性を表明するためにも意味があるのではなからうか。本論で取り上げた学問研究法の類型論をも踏まえて、自らの研究の立脚点を自覚し、かつ明示的に表明することは、今後の研究活動の基本的態度となると思われる。

*自らの研究テーマおよび手法等を披瀝して事例報告に協力して下さった、河合泰弘・菅原研州・石田尚敬・大松久規・横山龍顕の各先生に深く感謝する。